

阿弥陀浄土院園池の 環境考古学的分析

平城宮跡発掘調査部は、2000年3～4月に法華寺阿弥陀浄土院の発掘調査を行い（第312次）、園池SG7700等を検出し、概要を『年報2000－Ⅲ』で報告した。この調査中に、周辺の環境変遷、園池の植栽、池水の状態等を知る目的で、環境考古学会（代表 金原正子氏）に依頼し、園池内の土壌を採取して堆積物の分析を行ったが、年報脱稿後にその結果を受け取ったので、ここでその主要内容を報告する。なお、本稿は金原正明氏監修の分析結果報告に基づくが、以下の文章の責は執筆者にある。

土壌採取は、池各所の計11カ所で行い（図139）、それぞれの場所で、池堆積土の最下層と上層を対象とした。なお、埋甕SX7686は、蓮などの観葉植物を植える枿としての機能を推定し、甕内部の堆積土を上・中・下層に細分して土壌採取を行った。分析の内容は、花粉分析、種実同定、珪藻分析である。

分析結果は詳細かつ多様なものであるが、注目されるのは次の3点である。① 植物の生育条件から池の水深を推定できたこと。② 植栽が推定される樹木・草本を検出したこと。③ 埋甕内堆積物より、園池周辺の環境変遷が推定できたこと（観葉植物は確認できなかった）。以下、それぞれを説明する。

① 数地点から、水生植物の草本花粉（ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イボクサ、ミズアオイ属、コウホネ、アサザ属、タスキモ属）と種実（ミクリ属、ヒルムシロ属ないしヒルムシロ科、イバラモ属、ホタルイ属、スゲ属ないしカヤツリグサ科、イボクサ、コナギ、タガラシ）を検出した。

これらは普通に池沼に生育する抽水ないし浮葉植物で、水深約0.3～1.0mの水域に生育することから、池の水深をこの範囲に推定できる。

② 花粉や種実より植栽が推定される樹木は、クロマツな

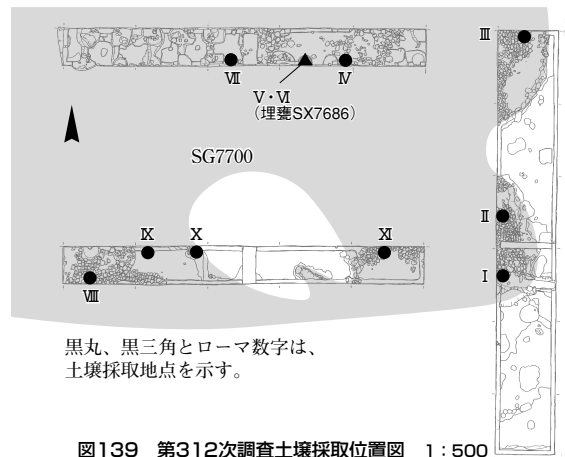


図139 第312次調査土壌採取位置図 1:500

いしアカマツ、サンショウ属、センダン、モチノキ属、カエデ属、ツバキ属、アオキ属、カキ属、ツツジ属のほか、ヤマモモ属（Ⅰ地点）、モクセイ科（Ⅱ地点）がある。草本では、ユリ科（Ⅰ・Ⅲ地点）、アヤメ属（Ⅱ地点）が推定される。

③ 埋甕SX7686では、下層より湿地を好まない人里植物ないし耕地雑草の花粉・種実を検出し、珪藻では、陸生珪藻を多く確認できた（図140上段）。以上から下層の時期は、周囲に樹木がほとんど分布せず、池沼状に大きく滞水していなかったと推定される。これは、池構築時やその直後で、池として機能する以前の植生ないし環境を示唆するものであろう。

一方、中層では樹木花粉を多く検出し、水生植物やナデシコ科の花粉・種実も出現する。珪藻では、流水性種、流水性種、沼沢湿地付着性種群、陸生珪藻が混在する（図140中段）。以上から、中層の時期は、埋甕内やその周辺で水生植物が生育し、浅い水域を呈していたものと推定でき、周囲にナデシコ科などの乾燥地を好む草本も分布していた。園池として機能した時期の状況にふさわしいものであろう。

上層では、イネ科が増加し、種実では水生植物が豊富に検出され、珪藻では止水性種ないし沼沢湿地付着性種群の出現率が高い（図140下段）。調査地周辺は、「泥田」と地元の人が呼ぶ地下水位の高い水田であるが、埋甕が埋没する直前には、すでに園池は水田化され、現在に近い状況であった可能性があろう。（清野孝之）

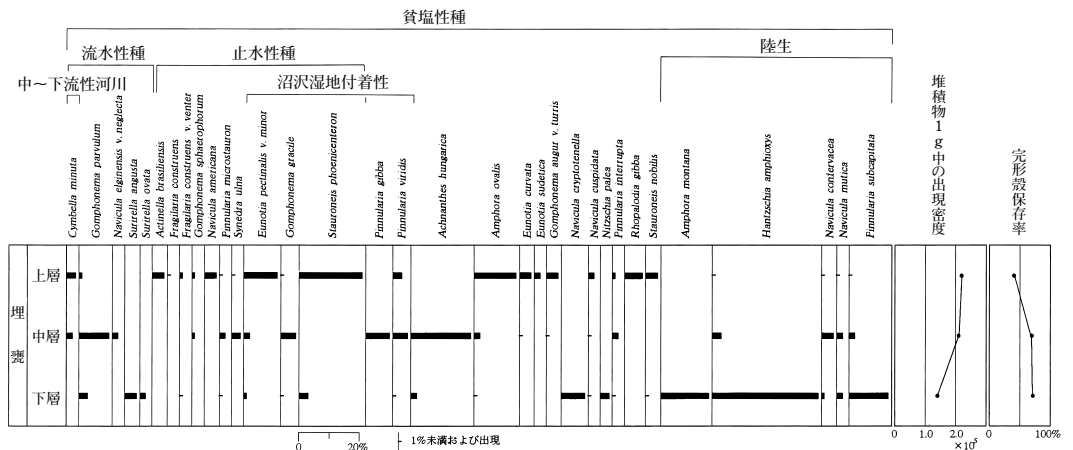


図140 埋甕SX7686内土壌中の珪藻ダイアグラム